

# 日本性科学会 ニュース

第37巻 第4号

平成30年（2018年）12月

発行人：大川 玲子 印刷所：株式会社 純文社

## 2019年研修会・学術集会・研究会予告

### 第12回 日本性科学会近畿地区研修会

期日：2019年2月3日（日）10:00～17:00 会場：梅田ガクトホール URL：<https://www.kgn.or.jp/map.html>  
〒530-0001 大阪市北区梅田2-6-20 パシフィックマークス西梅田14F  
連絡先：TEL 06-6346-0569, FAX 06-6346-5095, E-mail [info@kgn.or.jp](mailto:info@kgn.or.jp)  
予定単位：日本性科学会10単位 テーマ：性に関する思いと協働

今回の研修会は、後援させていただきます KGN（関西 Gender Identity Clinic ネットワーク）のメンバーを中心にプログラムを構成致しました。我々が日々行っておりますジェンダーに関わる医療に加え、法律やジェンダー以外の医療についてもお伝えしたいと考えています。

本研修会がさらなる発展を遂げるべく、僭越ではございますがまずは我々のことを皆様にお伝えし、今後のプログラム構成、演者、座長などにおいて様々な方々のご参画が頂ければと願っております。

#### プログラム

10:00	開会式 主催：日本性科学会 理事長 大川 玲子 後援：NPO 法人 関西 GIC ネットワーク 理事長 康 純 司会（さくま診療所 佐久間 航）		
10:10～10:50	男性更年期に対する精神科医の思い	関西医科大学	織田 裕行
10:55～11:35	オフィスウロロジー 男性更年期の支援 座長（はりまメンタルクリニック 針間 克己）	岩佐クリニック	岩佐 厚
11:40～12:40	法律家から見た多様性の思想	みやこ法律事務所	東田 展明
12:40～13:00	討論		
13:00～14:00	休憩（単位授与） 司会（新淡路病院 堀 貴晴）		
14:00～14:40	関西 GID ネットワークの歩み	フクダクリニック	福田 亮
14:45～15:25	性同一性障害／性別違和に対する身体的治療 ～過去を振り返り、未来を見つめる～ 座長（あべメンタルクリニック 阿部 輝夫）	ナグモクリニック大阪	丹羽 幸司
15:30～16:30	トランスジェンダーの理解とかわり	大阪医科大学	康 純
16:30～16:50	質疑応答		
16:50～17:00	閉会式		

### 第48回セックス・カウンセリング研修会

期日：2019年6月2日（日） 会場：東京慈恵会医科大学西新橋校（東京）

### 第39回日本性科学会学術集会

期日：2019年10月6日（日） 会場：鹿児島市医師会館（鹿児島市加治屋町3）  
学会長：玉昌会高田病院泌尿器科科長 内田洋介 テーマ：新時代の性科学を模索する～明治維新ゆかりの地にて～  
同時開催 2019年10月5日（土） GID 学会エキスパート研修会、第20回日本性科学連合セミナー

### 症例研究会

期日：2019年1月30日（水）18:30～20:30 3月28日（木）18:30～20:30  
会場：日本性科学会事務局 ＊参加希望の方は事務局にお問い合わせください。

Vol. 37	日本性科学会
No. 4	〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F TEL・FAX 03-3868-3853



## みやぎの女性と男性 からだと性のホンネ！ 2017 それぞれ100名に聞きました 報告集の紹介

村口きよ女性クリニック 村 口 喜 代



第38回日本性科学会学術集会において、一般演題で「みやぎの女性・男性からだと性のホンネ」アンケート調査から～進む性行動の消極化、関係性に新たな兆しが～を発表の機会を得たが、その詳細を記録した報告集を紹介させていただきます。

当調査は、市民活動団体リプロネットみやぎ（正式名称：リプロダクティブ・ヘルス/ライツネットワークみやぎ）で行った。当会はリプロの精神を啓発・推進することを目的に、1998年2月、日本性科学会の大先輩・故長池博子代表の元に設立し、現在私が代表を務めている。創設以来、社会的に弱い立場にある女性の「からだところの健康」をめざし「自分のからだのことを正しく知ろう」「男女が互いの性を正しく理解し、望ましいパートナーシップを歩んでいこう」を中心のメッセージとして、少人数のリプロサロン、会員研修会、市民公開講座、若者・学生への市民活動体験など活動してきた。

創立10周年の記念事業として第1回調査（2008年）を行ったが、近年、若者の性行動の分極化・消極化、セックスレス夫婦の増加など、性行動をめぐる新たな変化に鑑みて、今回10年弱の経過を経て、第2回目の調査を行った。1、2回いずれも集計作業は試行錯誤の日々だった。データを転がした。集計法の工夫の後に、見えてきた男女の違い、普段感じていたことが裏付けられた。前回2008年の結果と比較検討し、予想通り、男女の性行動は消極化していたが、一方男女の「関係性」では新たな兆しが見えてきた。

未婚者ではとくに男性の消極化が目立った。「性交渉の意味」について、前回は、女性では「愛情表現」「ふれあい（コミュニケーション）」「子どもをつくる行為」が、男性では「快楽」が有意に多かったが、今回はまったく男女差がなくなった。「性交渉の意味」に男女差が無くなった、それはとても注目に値することと思う。

既婚者ではセックスレスが増加した。性交渉がなくとも夫婦の関係は「うまくいっていると思う」が、男女ともに多く6～7割であり、子どもがいる夫婦は性交渉をしない割合が有意に高かった。「いくつになっても性交渉は必要と思う」と回答した40代以下の男性では性交渉している割合が有意に高かったが、女性では差がなかった。「性交渉の意味」を「愛情表現」「快楽」と考えている40代以下の男性では、性交渉ありが有意に多かったが、女性では「性交渉の意味」と「性交渉の有無」とは関連がなかった。マスターベーションは活発、婚外性交、風俗利用経験、いずれも性交渉の有無とは関連がなかった。性交渉を「したい時にしたいと言えるか」「したくない時にしたくないと言えるか」では男女差がなく、前回と比較し共に意思表示できるようになってきた。当然のことながら、それぞれ男女間での違いはあるが、男女の関係性は決して後退したわけではない。これまでの男性主導の一方通行の性の関係から、新たな関係へと変換しつつあると読み取れる。非正規雇用の若者の増加、子育てなどに時間が割かれるなど・経済的・精神的余裕のない日常が性の関係性に立ちはだかっている。身近なところで、男女の共同参画は進んできたと感じられる昨今であり、性に関わる領域で女性も積極的になってきており、男女の関係は変わっていく、変わらざるを得ない。今回の結果は、そうした通過点で起こっていることと思われた。

本報告集は、アンケートの結果とともに「トーク&トーク報告会」の記録であり、大変貴重な冊子になったと自負している。アンケート結果を身近な自分たちのこととして消化していただくための工夫として、「トーク&トーク」の企画となった。性の領域は、いまだ“あうん”の領域、なかなか言語化が進まない。その一歩を進めたい、進めなければと思った。コメンテーターは、社会的立場の如何に関わりなく、一人の個人として語れる人を探した。何人かには丁重に断られたが、意外な人、意外なところに賛同者がいた。知名度の高い村瀬幸浩氏にもコメンテーターの一人として登場していただいた。私も一人として自分史を語った。アンケートから見えてきたことが、コメンテーター達のそれぞれの個人史と重なりあって、性をめぐる男女の日常が身近なものとなった。報告会は大変盛り上がり盛会裏に終えた。報告集には、参加者の“気づきと感想”とともに、後日村瀬幸浩氏から寄せられたメッセージも載せられています。ぜひ多くの方々に報告集を読んでいただきたく、よろしくお願いします。





## 第19回日本性科学連合性科学セミナー・第38回日本性科学会学術集会

第38回日本性科学会学術集会 会長

エスエル医療グループ すぎやまレディスクリニック

杉山正子

平成30年9月22日・23日、中日パレス（名古屋市）において、第19回日本性科学連合性科学セミナーと第38回日本性科学会学術集会を開催いたしました。名古屋では初めての開催でしたが、性科学セミナーに229名、性科学会に317名と多数の参加者がありました。無事会を終えることができて安堵するとともに、ご支援・ご協力をいただいたすべての皆様に深く感謝しております。

今回は平成最後の学会であり、平成の30年間の性科学を総括しそれを次世代にどのように伝えるかという意味を込めて「次世代につなぐ性科学」をテーマといたしました。

性科学セミナーでは、「今こそ活かそう！性科学の知識」のテーマで、日本家族計画協会の北村邦夫先生、日本思春期学会の秋元義弘先生、日本性教育協会の早乙女智子先生、日本性感染症学会の石地尚興先生、日本性科学会の丹羽咲江先生、日本性機能学会の小堀善友先生がそれぞれの視点から「性科学の知識をどのようにしてつないでいくか」を弁舌さわやかに語って聴衆を引き付け、ディスカッションも盛り上がりしました。日本性科学会の丹羽咲江先生は「陰毛脱毛の捉え方と性」と題して陰毛の生物学的意味、脱毛の歴史、海外事情を提示した後、陰毛脱毛の可否については「自分の体や性器を肯定的に捉えることと、脱毛が自分のための行為であることが大切」とまとめられました。

22日夜に開催された合同懇親会は、名古屋めしと地酒を味わっていただき、愛知県医師会長で産婦人科医の柵木充明先生の挨拶もあり、参加された皆様に名古屋をアピールしました。賑やかで笑顔のあふれる会となりました。今回、学会場に託児室も開設しましたので懇親会には子連れ参加もありました。

性科学会学術集会は盛り沢山の内容を詰め込んだタイトなスケジュールで運営されましたが、座長と演者の協力を得て、ほぼ予定通りに進行されました。当初から懸念された消化不良感は残り、折角の講演内容をディスカッションで深める時間が少なかったことは、主催者の反省点です。一般演題では産婦人科、泌尿器科、看護職、心理職、生命科学等幅広い分野から、LGBT、性機能障害、性暴力等多様なテーマでの発表がありました。第一会場・第二会場とも活発な議論が繰り広げられていました。特別講演は、名大国際保険医療学・公衆衛生学の青山温子教授に「健康・開発とジェンダー」のテーマで世界の現状を語っていただきました。教育講演は愛知医大客員教授の山田琢之先生に「産業衛生にみる『性』～中世ヨーロッパ、働く人々の性を検証する～」、ランチョンセミナーは國學院大学客員教授の村上侑美枝先生に「遊郭に学ぶ『性』のマナーについて」のテーマでそれぞれユニークな講演をしていただきました。シンポジウムⅠは「日常臨床で遭遇する『性』の問題」をテーマに、産婦人科医から「悪性腫瘍治療における妊孕性の温存」、泌尿器科医から「男は狼だけじゃない～意外に多い射精できない男性～」、精神科医から「発達障害児／者に性の問題をどのように指導するか」、乳腺外科医から「乳房再建術後の乳頭感覚、性感の検討」、糖尿病専門医から「性機能への関わり的重要性」、日本がんと性研究会から「がん患者のセクシュアリティを支援する」と言うテーマでそれぞれ中身の濃い講演が行われました。シンポジウムⅡ「大学教育に『性科学』はどのように取り入れられているか」では各科の教育の現状と今後の展望が語られました。シンポジウムに先立って杉山が会長講演として、全国の大学へのアンケート調査の結果を報告しました。詳細は学会誌で報告予定です。シンポジウムでは、泌尿器科の白井雅人先生は、医学部における性医学教育のための標準資料案として106枚のスライドを示され、精神科の康純先生は、コア・カリキュラムの変遷を示して、今後ジェンダーの視点を持った教育をするための人材の育成が必要と述べられ、看護学科の鈴木由美先生は、母性看護学概論では十分な時間が性科学全般の講義に当てられていることともに、学生の興味は自分達の恋愛や性の話題において高まる実情が述べられ、心理学科の石丸徑一郎先生は、新しい国家資格となった臨床心理士について説明し、受験資格を得るためのカリキュラムの中にみられる性科学関連分野の広がり可能性を示され、看護学科4年の門間日菜乃さんは、医療系学生団体における性教育等の活動報告とともに、大学生にふさわしい性教育を受けたいという希望を述べられ、産婦人科の古谷健一先生は、従来の「縦割り型」から「領域横断型」にシフトする医学教育の中で「性」も生物学・基礎医学から臨床各科を含む多くの視点から教育が行われるようになるという見解を述べられました。討論では、コア・カリキュラム作成の段階への性科学者の関わりが望まれるという意見が出されました。シンポジウムⅢは「性暴力加害者をなくすために～医療・教育・行政からみた支援～」をテーマに、精神科医の針間克己先生は、性犯罪者処遇プログラムの概要を説明され、立命館大学人間科学研究科の中村正先生は、性暴力加害者をなくすための教育について、加害者の心理や社会的背景、処罰のみでなく支援の必要性等を実践を踏まえて学問的に概説され、少年鑑別所首席専門官の岡部はるか先生は、刑務所・少年院・少年鑑別所における性暴力加害者への再発防止指導の実際と課題を語られました。現場で加害者の教育や再犯防止に取り組んでいるシンポジスト3人の発言は重みと説得力があり、議論も深まりました。

閉会式では、次回会長の内田洋介先生にバトンを渡して会を終了しました。



## 幹事就任のご挨拶

社会医療法人若竹会  
つくばセントラル病院 産婦人科  
田 中 奈 美



この度、日本性科学会の新幹事を拝命いたしました、産婦人科医の田中奈美です。兵庫県の出身で大阪市立大学医学部を1994年に卒業後、何の迷いもなく一番魅力を感じた産婦人科に入局しました。1996年からは、夫（国家公務員）の就職先がつくば市の国の機関だった縁で、筑波大学産婦人科にお世話になっております。

性科学会への入会は、手元にある最古の学会誌が1999年ですので、その年だと思います。その年の日本性科学会学術集会は三重県で開催されたため、私が学会の間家族は鳥羽水族館に行ったようです。産婦人科医として診療をする中で、性は個人の重要な一部であり、性的な情報を抜きには物事の本質に迫れないこと、性に関することは医学部で学ぶだけでは十分に対応できないので、学問としての性を包括的に勉強する必要があること…おそらくそのような理由で性科学会に入会しました。

筑波大学附属病院で1999年より「セクシャルヘルスケア外来」と称して、性に関する悩みや問題に対応するよろず相談的な外来を立ち上げました（といっても私が一人でやっていただけなのですが）。不妊外来からは女性の挿入障害のケースを、腫瘍外来からは、がん治療後の性の問題を抱えたケースなどを紹介いただき、性科学会で勉強しながら手探りで外来を続けておりました。

2005年4月より現職となり、同年には念願の「セックス・セラピスト」の認定をいただきました（2010年、2015年再認定）。大学の外来は、現勤務先での「性相談外来」に引き継ぎ、性に関する診療を継続しております。性相談外来には、女性の挿入障害や性嫌悪の方、セックスレスのカップルが主に来院されますが、性器の悩み、夫婦の関係性の悩み、男性のマスターベーションに関する相談、性的な妄想のある統合失調症の方、性別違和の方のホルモン療法、性分化疾患の方など多彩な相談があります。一方で、母乳育児支援を専門の一つとしており、国際認定ラクテーション・コンサルタントという国際資格を2006年に取得しました（2011年、2016年再認定）。妊娠中や産後の母乳育児支援に関わるとともに、NPOの理事として、支援者を対象とした勉強会の開催等にも関わっております。授乳中の射乳反射はオキシトシンの律動的な分泌によるものなのですが、乳汁が排出され飲みとらえるあの何とも言えない心地よさは、性の喜びにも通じるものがあるのでは、と感じています。実際、海外では、授乳による性的な快感を、「頻繁に」：16.7%、「たまに」：23.7%女性が経験していた、という報告があります（Avery MD, et al. 2000）。日本人の女性で同様の感覚を語る女性にはいまだに会っておらず、日本人でも同様な結果が得られるのか大変興味があります。日本での性教育の在り方や、性と健康に関する情報リテラシーに関しても思うところがあります。今後も性科学会の一員として学び、活動を継続し、悩みを抱えて受診をする方の幸せな性のありかたに少しでも貢献できればと思っています。皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

\*お詫びと訂正：ニュースレター第37巻第3号に「介入の糸口のつかめない性嫌悪の一例」についてご報告いたしました。文中の「誤：サインバルタ→正：レクサプロ」、「誤：常用→正：内服（常用する必要はないそうです）」に訂正させていただきます。ご指摘ありがとうございました。

## 2018年度 資格認定結果

資格認定委員会委員長 阿 部 輝 夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基づき、2018年度の新規資格認定並びに資格更新の手続きが行われました。厳正なる資格審査の結果、以下のように新規セックス・カウンセラー1名、セックス・セラピスト0名、更新セックス・カウンセラー5名、セックス・セラピスト11名が認定されました。

### 新規認定

セックス・カウンセラー	西 佳子
セックス・セラピスト	なし

### 更新認定

セックス・カウンセラー	石津 宏	山中 京子	杉山 正子	織田 裕行	道木 恭子
セックス・セラピスト	大川 玲子	村口 喜代	石津 宏	金子 和子	渡辺 景子
	西 丈則	針間 克己	山中 京子	織田 裕行	池田 稔
	佐々木 孝子				(登録順)

来年度も新規資格認定、並びに更新認定（2014年資格取得者が該当）の続きが行われます。申請を希望される方は、日本性科学会雑誌2018 vol.36 no.1掲載の資格認定規定並びに資格更新規定を御熟読の上、御準備をお願い致します。特に、学術集会・研究会などに御出席の際の受講証・出席証は、必ず保管してください。

申請の詳細は、2019年6月発行のニュースに掲載されます。